の間に一女をもうけたが、この娘が清原成衡の妻となったことは余り知られていない。

こうして多気氏の勢力は今の筑波、真壁、鹿島、吉田（今の水戸附近）信太東条（稲敷郡東部）に及んだ。先年東城寺境内から発掘された経筒に平致幹とあったが、もちろんこの人が納めたものである。

さて六代義幹のときちょうど源頼朝の時代でこのころ隣りの小田には頼朝の異母弟ともいわれている八田知家が新たに築城して移って来たが知家からみると常陸大掾家としてその伝統的な勢力は目の上のこぶ的な存在だったので、何とかこれを失脚させようとその機会をねらっていたがたまたま建久四年四月頼朝富士の裾野で大巻狩を行った。かねてから父の仇工藤祐経をねらっていた河津祐泰の二子曾我十郎祐成、五郎時致が見事に工藤の幕舎をさがし求めてその首をとった。このとき鎌倉では頼朝も危害にあったというデマが飛び関東の御家人はいづれも鎌倉に馳せつけることになった。このとき知家はさりげなく義幹に同行を求めた。（これより先知家はひそかに一村民として小田城主八田知家が兵を集め義幹を討とうと企てていると密告させた。）しかし義幹はその密告をうけてるので断った。やがて知家鎌倉に出て多気太郎義幹かねてから軍兵を集め堀を堀って城をかため謀反を企てていると讒言した。義幹間もなく鎌倉に召喚され百方弁解したが及ばず領地は没収、大掾職は分家の馬場資幹（致幹の弟清幹の系）に奪われその身は駿河の岡部泰綱にお預け、その終るところは不明である。彼が謀反の証拠として挙げられた裏堀は全く農民の水利のため堀ったもので八百年たった今日でもこんこんと流れて多くの水田をうるおしている。

北条町の町はづれの松にかこまれた大五輪塔が彼の墓石であるが、おそらく彼の徳をしたった後人が建てたものであろう。

多気山楚にある梅松山光明寺無量院は彼の戒名「無量院殿、阿弥陀仏」にちなんで時宗の一向有阿上人が彼の菩提のため建立したもので、命日が七月七日となっているところをみると六月二十二日駿河にうつされ、この日に首を斬られたものであろう。

二、小田城址

源頼朝の家臣八田知家の築くところ。子知重から小田氏を称す。八田知家は前記のように源頼朝の異母弟との説もあるが藤原秀郷の系である宇都宮氏の支族で今の下館市の八田の開発領主として八田氏を称するに至ったようで頼朝挙兵のころ早くも頼朝の家人となり、その信任をうけ文治元年守護地頭設置と共に常陸守護職に任ぜら